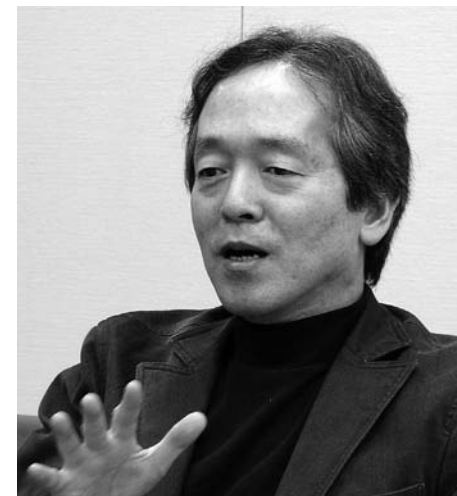


現代に何を語りかけているのか

対談 年百文学と『遠野物語』



赤坂憲雄

(民俗学者)

●あかさか・のりお 一九五三年東京都生まれ。東京大学文学部卒業。東北芸術工科大学教授を経て同大東北文化研究センター所長、福島県立博物館館長。東北学を提唱し九九年『東北学』を創刊するなど多彩な活動を展開。著書に『異人論序説』『排除の現象学』『象徴天皇という物語』『境界の発生』『岡本太郎の見た日本』『増補版 遠野物語考』などがある。

●やまおり・てつお 一九三一年生まれ。岩手県出身。東北大学大学院文学研究科博士課程修了。国立歴史民俗博物館教授、白鳳女子短大学長、京都造形芸術大学大学院長、国際日本文化研究センター所長などを歴任。著書に『近代日本人の宗教意識』『ブツダは、なぜ子を捨てたか』『日本人と「死の準備」』『わたしが死について語るなら』などがある。



山折哲雄

(宗教学者)

明治四十三年の刊行以来、百年の歳を数えた『遠野物語』——。日本民俗学誕生の記念碑とされるこの一冊は、しかし「民俗学」を確立する以前の「文学青年」によって書かれたものだった。その誕生の内的な経緯と、評価の変遷に触れながら、二人の碩学が『遠野物語』をどう読むべきか、この物語が現代の私たちに語りかけているものは何かを語り合った。

文学が民俗学が

赤坂 いまからちょうど百年前、明治四十三（一九一〇）年に刊行された『遠野物語』は、日本民俗学誕生の記念碑といわれています。けれども実は明治四十三年の日本に民俗学は存在しなかった。柳田国男はこのときまだ民俗学を作り上げていません。民俗学誕生以前に、文学青年であり農政官僚であった柳田が遠野の物語世界に出会うことによって、偶然に生まれたのが『遠野物語』です。『遠野物語』は民俗学的な資料としての顔と文学作品としての顔、そのどちらに光を当て

るかで読みがまったく変わる不思議な書物です。序文には「鏡石君は話上手にはあらざれども誠実なる人なり。自分もまた一字一句をも加減せず感じたままを書きたり」とあります。「鏡石君」とは柳田に物語を語り聞かせた作家志望の遠野の青年、佐々木喜善です。「聞きたるままを書きたり」であれば、相手の語りを聞き取ってそのまま文字にするということですが「感じたままを書きたり」は、これは文学的態度といっているのではないか。おそらく柳田はこの態度と手法を選ぶことによって『遠野物語』を一編の文学作品として著したのではないかと感じるところがあります。

山折 最初に『遠野物語』を柳田国男の作品として高く評価したのは仏文学者の桑原武夫でした。桑原は『遠野物語』を「まず何よりも、一個の優れた文学書である」と評しました。これはまぎれもなく柳田の文学的な才能によって編纂され、書かれたものと断定的に評価した。これがその後の『遠野物語』の運命を決定づけたんです。

赤坂 桑原武夫もそうですが、いくつかの節目で『遠野物語』に決定的な影響を与えてきたのは、文学に関わる人たちですね。たとえば泉鏡花は「この書は土地